

石組み炉である。次の北久根山式の時期では、山崎遺跡2号住居跡が長径八・五メートルの不整円形をなし、石町遺跡1号住居跡も長径七・四メートルの不整円形をなす。屋内炉は土器炉になっている。後葉の西平式の時期になると、原井三ツ江遺跡では四・五メートル程度の規模で、床面に地床炉を持つ住居跡がある。また、土佐井遺跡5号住居跡でも中央部に径六〇センチメートル程度の地床炉が設置されていた(第20図)。

墓 地

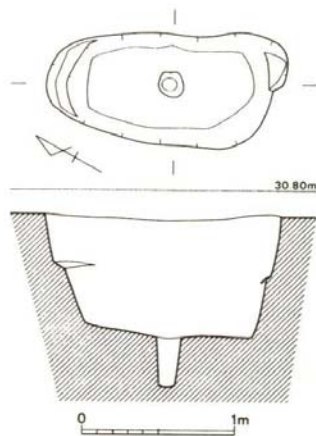
埋葬施設としては、後期から晩期を中心に甕棺墓や土壙墓が発見されている。浄土院遺跡では甕棺墓二基、山崎・石町遺跡では甕棺墓三基、十双遺跡では土壙墓一基、松丸D遺跡では甕棺墓四基、中村石丸遺跡でも甕棺墓四基・土壙墓一基などがある。なお、小原岩陰遺跡では前期に属すると考えられる土壙から人骨が出土している。一般的に墓地の設置場所は集落内部かまたはその周辺であるが、山崎・石町遺跡、中村石丸遺跡では集落内部から埋葬施設が発見されている。

三 生産活動

京築地域での食料獲得を中心とした生産活動に関連する遺物の主なものには、打製石斧・磨製石斧・削器・石錐・砥石・石匙・石鏃・石鏃・石鏃・磨石・磨石・敲石・石皿・台石などがある。これらの石器は、食料の獲得以外にも、食料の調理や、道具を作るための道具として使用されていた。

狩猟活動

縄文時代の最も一般的な狩猟用具は弓矢であり、石鏃は矢の先端に装着される石器である。石材は、大分県姫島産や佐賀県腰岳産の黒曜石と、安山岩とが利用されている。狩猟関連遺



第21図 築城町広末・安永遺跡
4号落とし穴状遺構

構として、当地域では落とし穴状遺構が幾つかの遺跡で確認されている。落とし穴状遺構は、平面形が一〜二メートル程度の円形ないし方形をなす竖穴で、底には杭を立てる穴が掘られている。豊津町徳永川ノ上遺跡では四一基にのぼる落とし穴状遺構があり、一部は後期のものと考えられている。ほかにも、豊津町神手遺跡で五基、築城町安武・土井の内遺跡で二三基、広末・安永遺跡で六基が確認されている。

る(第21図)。

狩猟の対象となっていた動物遺骸の出土例は少ないが、小原岩陰遺跡ではイノシシ・シカのほかにイタチ程度の小動物やカエルの骨が縄文土器の単純層から出土している。

漁労活動

京築地域では、縄文時代の貝塚は発見されておらず、食料としていた具体的な魚介類は不明である。ただし、現在の京都平野などは浅い内湾で、中小の河川も多数存在することから、海産物や淡水産の食料は豊富であったと推定される。

漁労活動を示す遺物としては、石錘がある。石錘は数センチメートル程度のやや扁平な小礫の両端を打ち欠き、ひもで結んで漁網のおもりとして使用



第22図 節丸西遺跡出土石錘

する道具であり、節丸西遺跡、松丸D遺跡などで出土している（第22図）。また、土器片を打ち欠いて作った土製円板も漁網のおもりの可能性があり、節丸西遺跡、山崎・石町遺跡、原井三ツ江遺跡などで多数出土している。

魚類の捕獲には漁網による以外に、釣りも行われていたと考えられるが、当地域では釣針の出土例はない。また、貝類も重要な食料となっていたが、小原岩陰遺跡ではハマグリ・カキ・ニナ・シジミなどの貝殻が出土している。

植物性食料の

採集活動

縄文時代の照葉樹林・落葉樹林の自然環境のなかで、最も豊富でかつ容易に採集できる植物性食料はクリ・ドングリ類などの堅果類であった。後期中葉に属する山崎・石町遺跡の1号竪穴住居跡からはクヌギ類・ナラ類・カシ類・シイ類などが出土している。これらのドングリ類は煮沸や水さらしして粒のまま食べることもできるが、石皿や磨石・敲石などの石器で製粉して食用に供する場合も多かったと想像される。

また、イモ類やユリ根などの根茎類も重要な食料であったが、これらを掘る道具として使用されたのが打製石斧である。打製石斧は中部地方から西部関東地方では中期に多量に使用されており、九州地方では後期後半から晩期の遺跡で多量に出土し、焼畑農耕の存在を示す資料ともいわれている。当地域でも後期・晩期の節丸西遺跡、松丸D遺跡、山崎・石町遺跡、原井三ツ江遺跡、土佐井遺跡などの集落跡で多数出土している。